

雲南省の少数民族について

—陸 偉東先生の講演にふれて—

古川 純

はじめに

2003年3月の社研春季海外調査の柱は、(前回の北京大学学術交流および大連調査を参考に)雲南省昆明市の昆明経済開発区・開発管理委員会調査訪問と雲南大学(昆明市)における学術交流研究会の開催のほか、社研としては新しい試みである地域文化(少数民族)の調査を加えて三本たてられたが、新たな地域文化(少数民族)調査については事前の準備研究が十分でなく、現地で雲南大学民族学院を訪問して少数民族に関する講演を拝聴するセミナーに期待するところが大きかったと思われる。本報告は、[資料]として収録させていただいた陸 偉東先生の講演を紹介することを中心にし、社研定例研究会「雲南調査報告」(7月5日開催、神田校舎社研会議室)における私の話題提供の問題意識にも若干ふれるものである。

(1) 雲南省少数民族への私の関心は、2000年3月に行われた本学人文科学研究会春季総合研究調査「異文化交流の諸相」(老岐・対馬調査)に参加した際に、特に老岐・原の辻(はるのつじ)遺跡において見学した日本最古の船着場跡からの連想に始まる(その連想は人文科学研究会・所報195号(2001.3)の拙稿「『一支国』はここにあった」に述べた)。原の辻遺跡は、中国の『三国志』のなかの『魏志倭人伝』(紀元280-289年に陳寿が『三国志』を編纂)に「一大国」(「一支国」の誤記)のなで登場する小国の中心集落のあったところである(むしろ「一支国」の都と言ってもよい、「朝日新聞」2002.7.25によれば、春の辻遺跡の墓域から多数の青銅器や管玉が発見され、権威の象徴とされる副葬品の出土から長崎県教育委員会は弥生前期末から後期前半までの歴代首長の墓域であると確認したことを発表した)。中でも私が想像をかき立てられたのは、幡鈴川(はたほこがわ)旧河道につながる再現された船着場跡である。荒波の玄海灘から島の穏やかな内海に入り幡鈴川をさかのぼって原の辻集落(「一支国」の王都)にいたる交易ルートが存在したとすれば、遠く中国・江南(揚子江下流域)や雲南地域からヒト・もの(技術)・文化が長年にわたって移動して伝わったことを連想させる。ある研究者は言う。「弥生時代中期に日本に航海民的要素を持ち込んだ有力な集団がいたと考えられる。彼らは、江南(中国の揚子江下流域)からきたのであろう。前漢代から後漢代にかけて、黄河流域の漢民族が江南への移住を盛んに行い、『呉越の民』と呼ばれた江南の先住民が追われている。彼らの中には、雲南やタイ、ミャンマー奥地に行って少数民族になった者もいる。江南の水軍の来航が、日本に小国が生まれるきっかけを作ったのだろう。」

(武光 誠・読売新聞調査研究本部『魏志倭人伝と邪馬台国』読売ぶっくれっとNo.10、1998. 11)
これに日本列島への「イネの道」のルート探しを加えると、私の当時の連想は限りなくふくらんだのである。

私をはじめ、アッサム地方に原生したイネが照葉樹林帯といわれる雲南、東南アジア山地、中国・江南地方、そして日本へと広がったという(1980年代に支配的だった)説(民族学という照葉樹林帯文化に関連する、武光 誠『邪馬台国がみえてきた』(ちくま新書、2000. 10)などの紹介)に依拠して、壱岐・原の辻遺跡と遙か雲南および江南を結ぶイネを運んだ「海上のシルクロード」を連想した。しかし、次々に行われる中国の水田跡発掘の報告と農学・遺伝学研究による栽培種の分析などの結果(「DNAでみた二つのジャポニカ」など最新の研究成果については、参照、佐藤洋一郎『稲の日本史』角川書店、角川選書337、2002、およびNHKスペシャル「日本人」プロジェクト編『日本人はるかな旅④イネ、知られざる1万年の旅』NHK出版、2001)、雲南起源説(雲南では白羊村遺跡で紀元前2000年の資料まで発掘)は後退し、長江下流域・中流域起源説(長江中流の湖南省城頭山遺跡で前約4000年前後の水田跡が、長江下流の江蘇省草鞋山遺跡で前4500-4000年の水田跡が発掘された、参照、寺沢薫『日本の歴史02 王権誕生』(中央公論社、2000. 12)が有力説となり、日本のイネ=栽培種の起源は長江中流・下流域がほぼ確定的となったようである。それを前提にすると、日本列島への「イネの道」のルート探しは、①江南から北九州に直接伝来したというルートと、②山東半島・遼東半島を経て朝鮮半島から日本へというルートのいずれであるかという議論に収斂してきて、雲南-江南-北九州(壱岐を含む)ルートは否定されたように思われる。

それでも私が壱岐・原の辻と雲南諸民族との間の「海のシルクロード」の存在と古い文化交流にこだわるのは、次の点によっている。再び「魏志倭人伝」によると、魏の使者が会った倭人たちは、男子は成人も子供もみな顔や体に入れ墨をしていたり、男子は木綿で頭を巻き、幅の広い布を結び重ねるだけの衣をまとっていた。婦人は、髪形についてはお下げや髷を結っており、衣については単衣のようにして真ん中に穴を開けて頭を通して着るものであった。これらの倭人の風俗は、入れ墨に関しては、「中国の史書は、古い時代にラオス、ベトナム、雲南などに入れ墨の習俗があったと伝える」といわれ、また男子と婦人の衣に関しては、「これは、今日でも南方に見られる袈裟衣と貫頭衣を表す」と指摘される特徴である(前掲・武光『魏志倭人伝と邪馬台国』)。これによれば、少なくとも魏の使者が会った時代の倭人の生活様式・風俗は、雲南諸民族と共通するものがあつた(後の大和朝廷の服装が、高松塚古墳壁画に描かれているように、北方系ないし騎馬民族系のもの(男子の衣褌=短い上着と太いズボン、夫人の衣裳=短い上着と長いスカート)であるのとは対照的に)ということができるのではないか。雲南省に近い広西省チワン族自治区の白褲ヤオ族(白褲ヤオの名前

は男がはいている白地の膝丈のズボンに由来する)の女が着る「貫頭衣」の紹介も参考になろう(武田佐和子「白褲ヤオ族の衣服」『自然と文化 24 春季号』(「特集雲南・貴州と古代日本のルーツ」1989.3.5、日本ナショナルトラスト)。

私は「海のシルクロード」について、もっぱら西(雲南・長江)から東(宍岐を含む北九州)へのヒト・もの(イネの栽培種など稲作技術)・文化(生活様式や風俗・信仰)の流れのみに注目してきたが、(西から来たヒトとともに、あるいは積極的に単独で)東から西へと「もの」を探しに船を操って航海して長江や雲南にたどりつき、彼らがもの・文化を北九州へ運んだ可能性には目を閉ざしていたように思う。このいわば発想の転換の必要を感じた重要な指摘は次のようなものである。

シンポジウム「アジアの稲作文化—東アジア文化共同研究体制の可能性—」(学習院大学東洋文化研究所)の記録を収めた諏訪春雄・川村湊編『アジア稲作文化と日本』(1996、雄山閣)という本がある。樋口隆康「アジアにおける稲作の起源と長江文明」、黄 強「中国の古代稲作遺跡と古代稲作文化」、諏訪春雄「稲を運んだ人びと」、宮田 登「稲作の民俗」、任 東権「韓国の稲作文化」、崔 吉城「韓国の稲作文化における『餅』」、大林太良「日本・韓国・中国の稲作起源神話」などの報告と、吉田敦彦氏を司会とするシンポジウム「アジアの稲作文化」が収められている。樋口報告は、日本列島への稲作の伝播ルートについて、長江文明の稲作が「むしろ日本と韓国とに直接一緒に渡って来た」という考え方を強調した。司会・吉田氏のまとめによれば、①稲作文化の面では確かに朝鮮半島・中国・日本には共通点があるが、しかし儀礼食としての餅の使われ方、餅に使う米の種類という点で韓国と日本は違うこと、②神話に関しては、中国・江南地方と日本に共通して見られるような要素が韓国には見られないこと、の2点が確認された。樋口氏は最後のまとめにおいて、長江起源の稲作が韓国経由ではなく直接日本列島に伝播したことの論拠として、①弥生文化の中には韓国から来た磨製石器や青銅器等の韓国から日本へ入ってきたものがあり、それが原因で稲作も韓国から伝来したという印象・考え方が強いこと、②しかし稲作などの文化の受入れに関しては、受入れ側の人々の主体性を重視して考えるべきではないか、③当時の倭人はそれまでの狩猟・採集生活ではやっていけなくなったというときに、生産的な穀物についてむしろ外地に行って倭人が体験をして(例えば朝鮮半島や華北に行って粟や稗を食べ、江南に行って稲に接した)、一番日本(九州)の環境に適しているものとして稲作を決めたと考えること、④新しい文化はみな渡来人が持ってきたということではなく、倭人が自ら求めて外へ出かけ体験を集めて判断したという認識をもつこと、をあげた。これは日本文化の形成にもかかわる発言であるが、「文化の受け入れ側の積極的な探索と選択」の視点を持つと、倭人と雲南諸民族の風俗面での共通性の背景に大きな枠組みを与えるのではないかと思われる。

(2) もう一つ、私が雲南諸民族の文化への関心をかき立てられているのは、人文研所報にも述べたが、次の「鳥居」の件があるからである。以前(1993年3月、第2回タイ・スタディツアー=タイ国内少数民族支援NGOを訪問・調査)、タイ北部・ラオスとの国境地帯に居住する雲南から移住した山岳民族・アカ族の村を訪問したときに、村の入り口に木製の鳥居(鳥居の横木に木製の小さな鳥が飾られていた)があった。アカ族は、訪問当時にも知識を得たが、雲南省ではハニ族(漢籍では愛尼(アイニ)ともいう)として、シブソンパンナ・タイ族自治州ムンハイ県を中心に居住している(総人口は1990年現在で125万4800人、田畑久夫ほか『中国少数民族事典』(東京堂出版、2001.9)(タイNGOの方の説明では、アカ族の青年たちが雲南ハニ族の村を訪問して自分たちの言葉で話したところ、そのまま通じて感激したということであった)。雲南ではかつては焼畑耕作でトウモロコシや豆類を栽培していたが、現在は棚田での天水による水稲耕作や茶栽培(半発酵紅茶である磚茶(たんちゃ)の普洱茶(プアールちゃ))を行っている。ハニ族の伝統年中行事としては、祭龍樹(2-3月)、祭山(3月)、祭水(6月)、祭天(7月)、苦渣渣(くちゃちゃ、6月正月とも呼ばれる秋の豊作を祈る予祝祭的な性格の稲作儀礼)などがあり、祭には必ず餅をつく。注目すべきなのは、ハニ族の「集落の入り口には龍巴門が建てられ、しめ縄、木彫りの男女の神像と鳥などが飾られ、年に2回新しくして祀る」という点である(以上、前掲『中国少数民族事典』所収の「33ハニ(哈尼)族」による)。後掲の陸先生のセミナー後、昼食時に陸先生に質問をする機会があったので、この「鳥居」の件についてお聞きしたところ、即座に「ハニ族の村の入り口にありますよ」と答えられた。それがおそらくは「龍巴門」で、門にはしめ縄と男女の神像、鳥が飾られているのであろう。私の長年の勝手な仮説(日本の「鳥居」=雲南ハニ族起源説、雲南=北九州相互海上交流説)に「王手」がかけられたように思ったが、今回の雲南調査ではそれを自分の目で確認する時間的余裕がなく、次の機会にまわさざるを得ないままに帰国したのは残念であった。(雲南省・少数民族の村を取材した最近のTV番組「棚田の回廊-コメの故郷 中国雲南省をゆく-」(2001.1.3、NHK BS I、120分)は、比較的多くの所員が視聴していたので7月5日の報告会ではビデオ上映もせず言及もしなかった。夏休みに入って、私の記憶をたどって自宅のVTR保管棚を探してみたところ、次の3本の番組のビデオ録画テープを“発見”した。①「弥生幻視紀行-秘境雲南・滇国王墓発掘-」(1994.8.11、NHK、40分)、②「長江を下る①雲南ハニ族の村」(1995.6.14、TBS、30分)、③「天上の村に正月がきた-中国ミャオ族・少女の願い-」(2001.1.2、NHK BS II、60分、ただし場所は中国貴州省)。①の「滇王国」は、紀元前2世紀から1世紀ころまで昆明の南にある李家山や石寨山(いずれも王墓が所在しさまざまな青銅器の副葬品等が発掘された)に位置した古代王国で、石寨山からは金印=「滇国王之印」が発見されている(私たちが昆明市の博物館で実物を見た。)

それは、日本の金印＝「倭国王之印」と同じく漢の皇帝から下賜された服属国家の象徴で、「金印ネットワーク」として「倭国」がはるか3000キロも離れた「滇国」と金印という象徴で結びついていた証明である。私の探していた木の「鳥居」は、②の映像の中で記録されていた。ハニ族の口龍村（人口800人）の村の入り口にその「鳥居」はあり、木の柱の端に木製の鳥が数羽、飾られている。またその村の家は茅葺で、屋根には神社建築でよく見る「カツオ木」がつけられている。映像で確認されたので、念のため付け加えておきたい。）（稲作儀礼からハニ族文化との比較をするものに、参照、曾 紅「中国ハニ族と日本との稲作儀礼」『自然と文化53』（「特集日本人と米」1997.2.24、日本ナショナルトラスト）

(3) 今回の社研雲南省調査における地域文化（少数民族）関連の訪問地は、以下のようである。

- * 3月16日（日）：上海から麗江到着後、世界文化遺産・古城、木府を見学
- * 3月17日（月）：麗江視察（玉龍雪山、黄山ナシ族村、トンパ博物館、トンパ文字について説明）。
- * 3月19日（水）：雲南大学訪問（少数民族セミナー＝陸偉東先生）
- * 3月20日（木）：イ族の居住地「石林」および「民族村」（主にタイ族、ワ族）見学

1. 中国の少数民族と雲南省―陸 偉東先生の講演とセミナー

雲南大学民族学院訪問においては、まず「雲南大学 民族調査成果展」(Achievements Exhibition of Ethnic Nationality Investigation, Yunnan University)（雲南大学跨世紀雲南民族調査『民族寨文化』雲南大学出版社、2001、がある）について施 錦芳さん（本学大学院経済学研究科修士課程外国人留学生、国際協力論、白(ペー)族の居住する雲南省大理出身）による説明を受けながら見学をし、ついで期待していた陸 偉東先生の講義を受け、セミナーを開いていただいた。陸先生の講演「中国雲南省の少数民族についての話し」は〔資料〕として、本稿末尾に収録したので参照していただきたい。以下には、私のセミナー筆記ノートをもとに、〔資料〕に述べられていない点をまとめておきたいと思う。

(1) 陸先生は、15年間に渡って、日本人研究者などとともに雲南少数民族の調査に協力され、（各少数民族の言語に通ずる通訳の助けを得て）調査の困難な山地にも分け入り、民泊をしながら各民族の言語や生活習慣等の文化について資料を収集されたとのことである。（1996年にチベット族の通訳とともに陸先生が協力して調査旅行を行った成果の一部は、中村保『ヒマラヤの東：雲南・四川、東南チベット、ミャンマー北部の山と谷』（山と溪谷社、1996）として刊行されている）

(2) 雲南省の少数民族は西部に多いが、地形は西部高地(6700メートル、寒帯)から中部(昆

明、1900メートル、温帯)、南部低地(ベトナムの近く、74メートル、亜熱帯)という具合に一つの大きな斜面を形成している。

- (3) イ族は、昆明近辺ではサメ族と自称し、石林近辺ではサニ族と自称する。
- (4) 最も人口の少ない独龍(トーロン)族は、人口約4500人で、北北西の貢山県に居住している。彼らには村人が一緒に牛を殺す行事＝「剽牛」がある。これは、①闘牛士役が踊り、牛を殺す、②牛の頭を老人が背につけて踊る、③皮を剥ぐ、④肉は村人に均分する、⑤料理は「シャラ」という(樹脂油で焼き酒をかけて煮る)、⑥その後歌と踊りが続く(祭り)という特徴がある。酒は「団結酒」(同心酒)と呼ばれ、二人一緒に飲むのである。
- (5) タイ族の荷物の担ぎ方には独特の特徴があり、天秤棒に直接すぐ荷物入れがつけられている。昔の日本でも見られた魚屋や八百屋の街頭の天秤売りの荷物入れのつけ方と違う。
- (6) ナシ族の一部族モソ人の「アシャ」婚姻(妻処＝つまどい婚)について、男は訪ねる女の家の屋根にまず石を投げ、家の裏門が開けられると、訪問OKのサインである。裏門が開けられないときや入り口に帽子がかけられているときには、すでに先客の「アシャ」(アシャ＝友だち)がいるということだ。そのときは男は別の女の家に行く。普通は一人対一人だが、一人で数人の「アシャ」関係をもつこともある(古川注：万葉の頃の妻問い婚時代と同様、一妻多夫＝一夫多妻ということか)。子供は女(母)の家で生まれる(母系社会、母親の兄弟が父親の役割を果たす)。モソ人にはパパ(父)にあたる言葉がない、男はすべて「アチュ」(おじさん)とよばれる。文化大革命期に「走婚」を止めて、男女二人の結婚制に転換したが、しかし四人組が倒れたあと、二人結婚制で結婚した夫婦は離婚し、再び「走



陸 偉東 先生

婚」に戻ったということである。(モソ＝摩梭人の「走婚」や家族制度については、遠藤織枝『中国雲南摩梭族の母系社会』勉誠出版、遊学叢書 24、2002、が写真入りで紹介している。)

- (7) 中国では国家として婚姻法が制定されたので、若者の間には(漢族・少数民族を含めて)民族間で結婚する例が増加している。いずれ「走婚」習慣は消滅するかもしれない。
- (8) チベットの天葬(鳥葬)では、「天葬士」(僧侶)がいて、儀式後に線香を焚くと煙が合図となって鳥(ハゲタカ)が飛来する。タイ族の水葬では、死者は川に流されるが、結局外国まで流されることになる。タイ族の間では魚は神と考えられ、神に食されることをよいと考えている。しかし最近では政府は火葬を勧めている。
- (9) 大理の白(ペー)族の帽子は4つの景色を表現している。白は雪山の白、花は刺繍で、月は頭で、風は白い糸をたらし示す。
- (10) タイ族の水かけ祭の3日間は、「空白」といわれ、何もしないで家で休むのが基本である。
 - (A) 外にでると「赶口」(ガンパイ)＝市場では、屋台と服装が重要だ。①焼き鳥の屋台は娘さんが相手を探している印であるが、②店に来た男が焼き鳥の値段を聞いたあとに、
 - (イ) 女が安い値段を言うときは「男に気がある」ことを示し、男はそばに座って焼き鳥を食べ、女は屋台を閉まって静かな場所へ移動する、(ロ) “鉄面皮”の男は高い値段を言ったりするが、女はただ黙っているだけである。
 - (B) 2日目の行事として、「□□」(リウボウ)という行事がある。未婚の娘が刺繍でカバンを作り一列に並んで好きな男のほうへそれを投げる、①その男がカバンを投げた女性のところに持っていくと、女は逃げる、男は



少数民族セミナー

その後を追い静かな場所へ移る、②または男がカバンを女へ投げ返す、③女はもう一度カバンを投げ返す、ということを繰り返す。(C) 3日目に「水かけ祭」を行う。午前中には、きれいな水を木の枝にかける、たくさんの水をかけ合うほど幸福だという。午後には、泥水をかけ合う。シーサンバンナとは、シーサン=12、バンナ=地方で、「12の地方」を意味する。(古川注：タイでは「シプソンバンナ」といい、私の記憶では、「シプソン」はタイ語で7を意味し、「バンナ」は田を意味するように思うので、おそらく「7人の娘の伝説」と関連付けると「7部族の田んぼ」のことではないか?) この伝説はタイ族の中の7部族を示すのではないかという所員からの質問があったが、陸先生は、「民間伝承だが、①「悪魔」は、悪人は生活を破壊するものだということを示す、②「7人の娘」には漢民族の伝承の影響があり、有名な「賢い牛飼い」=牽牛と、「天の神の7番目の娘」=織女の伝説が関係しているのではないか」と答えられた。

(11) 東巴(トンバ)教は、麗江の地理的位置を反映して、四川省の文化、チベットの文化、大理の文化を混合させて、ナシ族独自の宗教を形成したものである。(なお、王超鷹『トンパ文字 生きているもう1つの象形文字』マール社、1996、がある。)

(12) 少数民族の認定(独立した民族の認定)とは何か、との所員の質問に対しては、陸先生は、「かつて雲南省には24の少数民族がいるとされたがシーサンバンナの山奥に居住する「ジノー族」が少数民族として認定され、25族となった、民族とは『自分の歴史・文化・言葉・風俗習慣をもつ』ことが基準であり、「モソ人」はこれとは異なる(ナシ族の中の一部族)」、と答えられた。

2. ペー族の「歌垣」調査に触れて―社研定例研究会の話題提供から

(1) 7月5日(土)に開かれた社研定例研究会「雲南調査報告」で、私は話題提供をかねて白(ペー)族の「歌垣」に関する調査報告のビデオの一部(後半の約30分の部分)を紹介した。それは、工藤 隆・岡部隆志編『ビデオ：中国少数民族歌垣調査全記録(1998)』であり、ビデオにはスーパー(字幕)がつけられていないので、同編『中国少数民族歌垣全記録』(いずれも大修館書店、2000.6) なお、工藤隆『ヤマト少数民族文化論』大修館書店、あじあブックス012、226頁-239頁で「ヤマト族文化」の歌垣と雲南少数民族の歌垣の比較がなされている)による調査報告(白族の言葉を日本語に起こしている)をあわせて紹介した。これは1998年9月の、特に大理州「石宝山歌会」の開催に合わせてビデオ撮影を含む調査が行われた際の記録である(なお、工藤隆『歌垣と神話をさかのぼる』新典社、新典社叢書12、1999、25頁以下に1995年の「白族ラオサンリンの歌の掛け合い」が報告されている)。

(2) 「歌垣」は、「常陸国風土記」(筑波山の歌垣)などにも記載がある古代日本の基層社会に

における共同体間の習俗として知られている行事である（工藤隆『中国少数民族と日本文化』勉誠出版、遊学叢書 25、2002、81 頁－82 頁に「常陸国風土記」から筑波山の歌垣が引用されている）。神話系統論や照葉樹林文化論によって中国西南部少数民族文化との比較研究がなされてきた。藤井友昭「アジアの歌垣〔照葉樹林帯に沿って〕」（『季刊 自然と文化 29 夏季号』「特集アジアの歌垣」1990. 6. 15、日本ナショナルトラスト）は、アジアの基層社会に類似する文化要素、中国西南部の歌垣などを論じながら、イ族の「公房」（コンファン）や「火把節」（6月24日）・「搶婚」（チャンフェン）、ハニ族の「串姑娘」（ツァンクウニャン）、ペー族の「親姑娘」・「火把節」・大理で行われる旧暦3月の「三月街」（サンユェチエ）、ミャオ族の「飛歌」（フェイコー）・「坐妹」（ツオメイ）、「走同年」（ツオウトンニイエ）、ヤオ族の「做浪」（ツオラン）・「会門」（フェイメン）、最大少数民族のチワン族の「歌墟」（コーシー）・「趕街」（カンチエ）・「合八字」（ホーパーツー）、トン族の「歌堂」、タイ族の「串姑娘」、さらに漢族の「対歌」などをとりあげ、同じような歌の掛け合いであっても、問答歌的であったり、相聞歌風であったり、と実に多様であることを指摘している。

(3) 麗江で居住村を訪ねたナシ族について触れておきたい。麗江を本拠地とする西部方言区のナシ族は、かつて明王朝時代以降、「木徳土司」（木天王、宮殿の「木府」を見学した）が積極的に漢文化を取り入れた結果、その影響を受け、ナシ族の中から「科挙」試験に多くの合格者を出したといわれる（現在、漢語の普及率 70%とされる）。また伝統的な葬式は火葬であり、死者の霊魂は「玉龍雪山」（ナシ族ガイドの白鹿国際旅行社・任 薇（レンウエイ）さんが背景としている写真の雪山）に昇ると信じられたとされる。東部方言区の永寧居住のナシ族（陸先生の言う「モソ人」と思われる）は、母系的家族制度を基盤に「妻処＝つまどい婚（阿注＝アチュ婚）」が行われ、各家には夫を迎えるための部屋が設けられているという。（以上、『中国少数民族事典』所収「32 ナシ（納西）族」による）



ナシ族ガイドの任さん（未婚女性の服装）と玉龍雪山

(4) 大理の白（ペー）族についても触れておきたい。ペー族は、早期に雲南に南下し

てきたチベット系の騎馬牧畜民文化とタイ系の水稲稲作文化の両方を受け入れ、さらに漢文化とも接触して漢王朝時代の「南詔国」や宋王朝時代の「大理国」の中核をなしたとされるが、モンゴル軍に滅ぼされた後、明王朝時代に大量の漢族兵が土着化したといわれる。注目すべきなのは、ペー族は、19世紀の「太平天国の乱」に際して蜂起したことがあったという事実であろう。（以上、『中国少数民族事典』所収「36 ペー（白）族」による）



ナシ族女性（既婚）の背中の中の七つ星（麗江古城）



「雲南大学 民族調査成果展」訪問で記念記帳（団長）